

2025年4月27日 復活節第2主日礼拝メッセージ

「神はいつもあなた方と共にいる」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 28章 11-20節

先週4月20日はイエス・キリストが死から引き起こされたことを記念するイースターでした。そのため世界中の教会で、イースター礼拝が行われましたが、その翌日21日にはローマ・カトリックの教皇フランシスコが天に召されたということが、ニュースとして報じられていました。88歳だったそうです。プロテスタント教会には教皇のような象徴となる人がいないこともあってか、私自身は多くのカトリック信徒の方々のように、教皇に特別に親愛の情を抱いているということはありませんが、それでも彼が史上初の南米出身の教皇であったり、「アッシジのフランシスコ」からその教皇としての名前を付けたことにも象徴されているように、世界の調和と平和、命の尊厳を守るために、地球環境問題や、社会の対立、紛争問題などにも積極的に関わったりと、2013年の就任以来12年間におよぶ在位期間に、彼は世界各地に様々な言動を示していましたので、多少なりとも見聞きしていました。

また21日に息を引き取る前日には、体調が優れないにもかかわらず、イースターという特別なお祝いの日であることもあって、バチカンのサン・ピエトロ（聖ペトロ）広場で大勢の人々の前に姿を現したそうですから、世界中の人々の期待に応える教皇という職責は大変なものだろうなとも思っていました。そのようなことを思っていましたら、また別のニュースで亡くなる2日前まで、ほぼ毎日、戦禍の続く、いや一方的に虐殺が続けられているパレスチナのガザ地区にある教会へ、ずっと電話を続けていたということも知りました。1年半前の2023年10月に反イスラエルの軍事組織ハマスによる攻撃を受けたイスラエルは、「ハマス壊滅作戦」としてパレスチナ自治区を攻撃し始めました。停戦協議が何度も行き詰る中、イスラエルが作戦を開始して以降、ガザではすでに5万1350人以上が殺されたそうです。その4割、半数近くは14歳以下の子どもだとも言われています。まるで「この世の地獄」とも思える場所に、毎日人々の身の上を案じる電話をかけ続けていたというのは、現地の方々にとっては大きな支えになっていたのでしょう。

ガザの現状について、とりわけ子どもたちの置かれている状況について、私は先日ある報告を読みました。「ガザで今、生きているということは、ただひたすら爆撃と飢えと恐怖を味わい続けることにほかな」らないのだそうです（岡真理「ジェノサイドが「日常」となったガザで」『はらっぱ』No.411）。そして、そこでは子どもたちは、いつ自分が殺されて、存在がなくなってしまうかもしれないという状況を、常に想像しているのだそうです。例えば、爆撃されて持ち物も身に着けている衣服も

なくなった場合でも、誰だか身元確認ができるように、「マジックペンで足に直接名前を書いて」と大人に頼んだり、自分の持っているおもちゃや、わずかなお小遣いを、「兄弟や友達にあげる」という遺言を書いたりしているのだそうです。そしてまた爆撃の報せを受けて、わが子の遺体を病院に引き取りに行ったら、そこにあったのは誰のものかも判別がつかない、バラバラになった数々の肉の塊だったのだそうです。もはや、何が言い得るのか、言葉を失いますが、それが今、この同じ世界で起きている現実なのだと思うと、本当に胸が痛みます。

ガザだけではありません。3月に数千人が犠牲になった大震災に襲われたにもかかわらず、ミャンマーではまだ軍事衝突、戦闘が続けられています。その他にも、世界の各地で、様々な形をとって、人が人を傷つける暴力があり、抑圧があり、差別があります。事の大小は比較するべきものではないでしょう。命が命として大切にされない。尊厳が無いものにされ、踏みつけられ殺されていく。生きているのに生きていない、死んでいる状態にされている……。そのような人たちは多いのではないかと思います。そのような世界の現実の中で、「死を越えて生きる」「死から引き起こされて復活されたイエス・キリストの命」は、私たちに何を伝えているのでしょうか。私たちが「復活の命」を生きる、「永遠の命」を生きる、とは、一体何を意味しているのでしょうか。

今回の聖書のお話は、先週の続きでした。イエス様が十字架の上で処刑されて、その遺体がお墓に収められた後、その翌々日、3日目には死から引き起こされて空っぽになっていた。復活させられたイエス様は、再び最初の地であるガリラヤへ行って、ここにはいない、というお話の続きでした。空っぽのお墓と天使に遭遇した女性たちが、他の弟子たちの所に戻って行った一方で、お墓を見張っていた番兵たちも、このことを都にいた祭司長たちや長老たちに報告しました。すると、イエス様を処刑した側の祭司長たちや長老たちは、兵士たちに口止め料を渡して、事の隠ぺいを図ったというのです。もちろん、これも歴史的事実かどうかは分かりません。

聖書に収められている4つある福音書の内、「墓に番兵がいた」と記しているのは、この「マタイによる福音書」だけです。当時のローマ帝国による十字架刑は、見せしめ刑ですから、受刑者・犯罪人が息を引き取った後も、その遺体をすぐには十字架から降ろすことをせず、ずっと野ざらし雨ざらしにして、野犬や狼などの野獣の餌食にしていたそうです。そんな犯罪者のお墓に、わざわざ兵士を見張りに立たせることはしなかったのではないのでしょうか。また、祭司長や長老たちも、厄介

者を始末できて満足だったのでしょう。それにもかかわらず、「わざわざ多額の金を渡して口止めした」というこのようなお話が記されたのは、「お墓が空だった」「イエス様は死から引き起こされた」という声が市井の人々の中に確かに多くあり、そのような声に対する反論として「夜中に仲間が遺体を盗んでいったんだ」という声もまた多かった、ということを表しているのではないかと思います。

さて、その後、イエス様を銀貨 30 枚で売り、裏切ったことを悔やんで自ら命を絶ったイスカリオテのユダを除いた 11 人の弟子たちと、おそらくここには名前の記されていないさらに多くの女性たちや仲間たちがいたのでしょう。仲間たちの多くが、イエス様の言われた通りに再びガリラヤに行き、復活のイエス様と再会しました。しかし、そこにおいても尚、「疑う者もいた」とあります。仲間たちと一緒に、ガリラヤまで戻り、イエス様に再会したけれども、それでも尚、疑ってしまう。目の前にいるイエス様と、自分事としては、真実には出会えていない、ということでしょうか。確かに、復活のイエス様の姿、顔かたちは、生前の外見とは異なっていたような記述もありますから、仲間たちの中には「イエス様と再会できた」と感じた人がいる一方で、「本当にこれがイエス様だろうか」と疑っていた人たちもいてもおかしくなかったのだらうと思います。

そしてイエス様は言われました。「<sup>18</sup> 私は天と地の一切の権能を授かっている。<sup>19</sup> だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼(バプテスマ)を受け、<sup>20</sup> あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。これが「マタイによる福音書」の最後の言葉です。キリスト教会ではこの 19 節の「全ての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを受けなさい」を、「大宣教命令」と捉え、宣教師たちが世界中に伝道しに行く根拠としてきました。「イエス様の遺言」のような「一大命令」だというわけです。しかし、本当の最後の言葉は 20 節の「私は世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる」です。この言葉を聞いて思い出すのは、同じ「マタイによる福音書」の冒頭 1 章 23 節の言葉「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。これは『神は私たちと共におられる』という意味である」というイエス様の誕生した、クリスマスの場面ではないでしょうか。冒頭の 1 章で「神は私たちと共におられる」と呼ばれる方がお生まれになり、最後の 28 章では復活させられたイエス様が「世の終わりまで、私はいつもあなた方と共にいる」と宣言される。その二つの言葉にサンドイッチのように、挟み込まれる形で、この「マタイによる福音書」は記されています。ですから、そこに記されているイエス様と仲間たちの言動、物語は

全て「神が共にいて下さる」ということはどういうことか、「神が共にいて下さる」中で私たちはどのように生きていくことが出来るのか、ということ、を表しているとも理解することができるのではないかと思います。

イエス様が死からの引き起こされたイースターの物語を、私は保育園の子どもたちに話す時、要点として「人は死んじゃったら、いなくなるけど、神様がいなくなったら困るよね。イエス様は殺されて死んじゃったけど、復活されて、今もいつも一緒にいるんだよ」と伝えています。この世界、全ての命を創られた神は、この世界がどんなに苦しい状況にあっても、決していなくならない。何故なら創造者だから。そしてその姿は、死からさえも引き起こされたイエス・キリストが「私はいつもあなた方と共にいる」と言われた言葉にも表されている通り、いつも私たち、全ての人たちと共におられるのだと信じます。今も確かに生きて、共にいて下さる。そうでなければ困ります。命の源である神がいなくなってしまうとは、私たちは生きていくことが出来ません。

19 節にある「全ての民にバプテスマを授けなさい」は、教会の入会儀式としての洗礼式（バプテスマ）のように理解されて来ましたが、元来のバプテスマは「死と引き起こし」の象徴でした（ローマ 6:3-11, マルコ 10:35-39）。イエス様の十字架上での受難のように、私たちもまた死にそうな目に遭うことがあります。とても生きていられないような苦しい目に遭うことがあります。そのような苦難によって、それぞれ「生きているのに死んでいる」、「死」としか呼べないような現実の中にあっても、父と子と聖霊である神に向かって、神と共にあって、そのような「死」の中から引き起こされて生きる。そうすることが出来る。なぜなら、復活のイエス様が、今もいつまでも共にいて下さるから。「そのことを全ての人々に身をもって伝えて行きなさい」。「一人一人が自分事として、自身の歩みで周囲に示していきなさい」……。それぞれがイエス様の遺言、残された最後の命令の意味だったのではないかと思います。

決して、いいことばかり、楽なことばかりではない現実世界の中で、「死から引き起こされた復活のイエス・キリスト」と共に生きる、私たち自身が「復活の命を生きる」とは、神が今もこれからも、いつでもどこでも、共にいて下さるということに、信頼して歩むということ。安易に「大丈夫」とは思えないような時でも、「神様が一緒にいてくれるから大丈夫。周りで支え助けてくれる仲間たちと一緒に、思い切って一步を踏み出してみよう」と思って、信頼して歩みを起こしてみること、ではないでしょうか。復活のイエス様は、今日も確かに、私たち全ての人々と共におられます。その真実の言葉によって、私たちはまた今日もここから、導かれて参ります。